

埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況（2002）

2002年に埼玉県で分離された腸管出血性大腸菌は74株でした。月別の分離株数で見ると、1月、3月を除いて毎月分離されており、例年どおり夏期に多い傾向を示しました。分離された74株のうち18株（24.3%）は患者発生に伴う家族検便や、給食従事者の定期検便で検出されたものでした。血清型ではO157:H7が62株（83.8%）と最も多く分離されていました。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型（2002）

血清型	毒素型	検出数	血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT 1 & 2	35	O26:H -	VT1	1
O157:H7	VT2	27	O111:H -	VT1	2
O157:H -	VT 1 & 2	4	OUT:H 2	VT1	1
O157:H -	VT2	3	合計		74
O26:H11	VT1	1			

分離株数の多いO157:H7についてはすべての株を、その他の血清型については必要に応じてP-FGE法を用いた遺伝子型別を行っています。2002年に分離された分離菌株のDNA切断パターンによる型別では、O157:H7（VT1&2産生）35株が24パターン、O157:H7（VT2産生）27株が18パターンと多様なパターンを示し、2001年に見られた特定パターンによる集積性は見られませんでした。また、7月に長野県で輸入馬刺しからO157:H7が分離され、同時期に県内で発症していた患者の調査や流通経路の調査を実施しました。そのなかで、馬刺しを喫食していた患者分離株と長野県の馬刺し分離との遺伝子型別を行いました。パターンは一致しませんでした。

今後気温が上がり、腸管系感染症の発生が増える時期になります。感染症が発生した際の原因究明調査等へのご協力をお願いします。